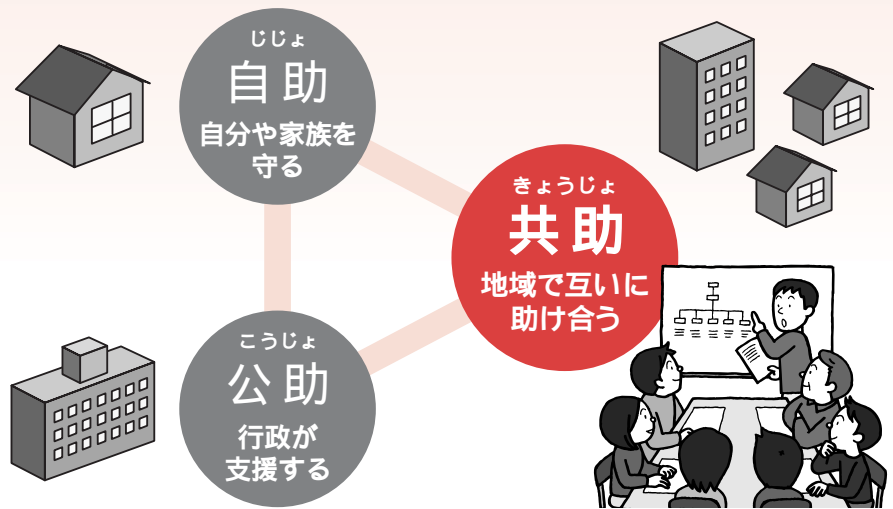


地域みんなで防災に取り組む

助け合いの仕組みづくり

市では、災害に強いまちをつかっていくために、自分の家族を自分で守る「自助」、地域で互いに力を合わせて助け合う「共助」、行政が支援する「公助」のまちづくりを進めています。

「共助」である“助け合いの仕組みづくり”は地域で支援を必要としている人の情報をつかみ、互いに助け合うことで、災害による被害を最小限にしようというものです。



災害が起きた時、自分だけでは不安なこと、ありませんか？

「もしも...災害が起きたらどうしよう」と思っているだけでは前には進みません。

少しでも早く互いの安否確認や救出ができるよう、事前に地域で話し合い、「助け合いの仕組み」をしっかり決めておきましょう。

阪神・淡路大震災の記録によると...

震災で救助された方の8割以上が「地域の助け合い」で救助されたといわれています。



出典：(財)消防科学総合センター

高齢で1人暮らし。すばやく災害に対応できるかとても不安...



病気やけがなどの状態が良くないので、災害の時、避難に遅れそうで心配...



体が弱いので災害の時、誰か手助けしてほしいけど...



日本語があまりよく分からないので、災害情報をどうやって集めるのかわかりません...

「助け合いの仕組み」のイメージ

自治会 組

計画にそってそれぞれ安否確認を行う

支援者Aさん

Bさん



AさんはBさんの安否確認を行い、地域の集合場所へ一緒に行く。

支援者Cさん

Dさん



Cさんは被災したためDさんの安否確認ができず、2人とも地域の集合場所に行けない。

地域の集合場所

自治会の組名簿で安否確認を集約する。



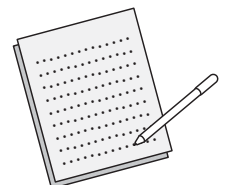
自治会 組

Cさん、Dさんの安否が分からないため救助に向かう。

集合場所に集まる

避難所

各自治会の組名簿を集め、救助と救護活動をする。



避難所に避難する

助け合いの仕組みづくりの進め方

地域で話し合う

市役所や消防署の協力を得て、仕組みづくりの講習会や説明会を開きます。



1

要支援者の情報をつかむ

災害時に支援が必要な高齢者や障がい者などを把握します。



2

個別支援計画を作成

支援が必要な方を誰が支援するか決めます。



3

訓練を実施

仕組みがうまく機能するように訓練をします。



4

ポイント

自治会など身近な地域から始める
地域の実況に応じてできることから始める

被災者の声に学ぶ「大震災への備え」

突然大きな地震に襲われたら、私たちは果たして適切な行動がとれるのでしょうか。

平成7年1月17日未明に発生した阪神・淡路大震災は、多くの人々のかけがえない大切な命と貴重な財産を奪いました。

実際に被災された方々の声に多くのことを学ぶことができます。いつ起こるかわからない地震への普段の備えについて学びましょう。



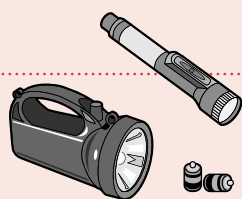
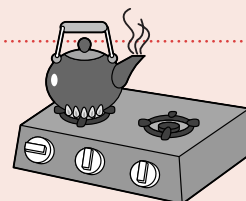
出典：(財)消防科学総合センター

まず火の始末とと思っていましたが...

「火を消せ！」地震の時の心得として頭にありましたが、揺れているときは、とてもそんな余裕はありませんでした。火の始末を思い出したのは10分ほど経ってからです。避難する時に、もう一度火の元を確認しました。

ポイント

揺れが収まってから
消しましょう。



懐中電灯がどれほど大切か...

真っ暗でした。「何がなんだかわからなかった...」という実感です。停電で避難の準備は玄関に置いてあった懐中電灯だけ...これに頼りました。懐中電灯の大切さを痛感しました。

ポイント

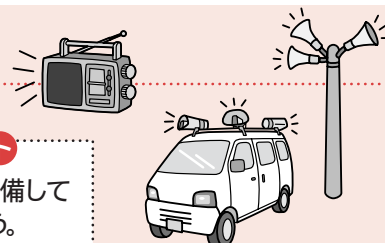
いつも目につくところに
置いておきましょう。

正確な情報がいかに大切か...

被災直後、なにより欲しかったのは、情報でした。何が起こったのか、どこへ行けば安全なのか、不安はつのるばかりでした。ご近所の方の話でもどれを信用していいのか迷いました。ラジオを持った方々のところに行き、やっと正確な情報を得ることができました。

ポイント

ラジオを準備して
おきましょう。



私たちの身に突然襲いかかるかもしれない災害。命を守る備えはできていますか？

自分の身は自分で守るのは当然ですが、いつ起きるとも限らない災害。地域で助け合うことが必要になることがあります。その時に備え、「助け合う心の輪」を広げていきましょう。

問員弁庁舎 総務課 T 74-5805 F 74-5800